

## 巻頭言

# 日赤図書館協議会会長に就任して

芳賀赤十字病院 院長  
安田 是和

このたび前任の成田赤十字病院加藤前院長先生の後任として、日赤図書館協議会・会長を拝命しました、芳賀赤十字病院の安田です。どうぞ宜しく願い致します。

さて、最近の病院の図書室機能に関して、運営側、現場、利用者の立場から考えてみたいと思います。

まず、病院の図書室の役割を一般的にどのように考えられているか、NPO 法人日本医学図書館協会の見解がカレントアウェアネス（国立国会図書館公式サイト）に纏められていますのでご紹介致します<sup>1)</sup>。日本医学図書館協会の会員の多くは大学医学部の図書館など大きな施設の医学図書館であり、赤十字病院に一概にあてはまりませんが、これによりますと、①医学情報のニーズ把握 ②情報検索 ③医学教育支援、チュートリアル ④情報リテラシー教育 ⑤病院機能評価：医療法第22条に図書室の設置が規定されている ⑥E.B.M（Evidenced-Based-Medicine）：臨床医の経験だけに偏らず、科学的な根拠と患者の価値観をも合わせた医療の実践の支援 ⑦診療ガイドライン：特定の臨床状況のもと

で、適切な判断や決断を下せるよう支援する目的で体系的に作成された文書の提供 ⑧医学的図書館の将来像：医学図書館のあるべき姿の提言 ⑨患者・市民への健康（医学・医療）情報の提供などとされています。

また病院図書室の現場担当者からは問題点も指摘されています。①他業務との兼任の担当者が多く、図書業務に十分な時間をかけることができない ②他機関との交流や研修の機会が少なく基礎的な図書業務についても学ぶことができない ③十分な蔵書のスペースを確保できない ④電子ジャーナルの価格高騰、限られた図書予算 ⑤電子ジャーナルと冊子体をどのように共存させるか ⑥利用者が求める情報を提供するためのスキル習得、変化する医学情報への対応 ⑦館種が異なる図書館の連携体制の整備不足。

一方、利用者の声としては①欲しい資料が手に入る ②機器が整備されている ③インターネットが使える（文献検索の情報環境）④落ち着いて学習に取り組める環境 ⑤頼りになる担当者がある ⑥現場を離れて一息つける癒やしの場所が欲しい、などです。

日本赤十字社は全国に92病院があります。規模や地域が異なり一概に“日赤病院”として比較を行うことはできませんし、適切ではないと考えています。しかし、病院図書室の

YASUDA Yoshikazu

TEL：0285-82-2195 FAX：0285-84-3332

y.yasuda@haga.jrc.or.jp

主な役割と問題点には上記報告に共通したものがああります。それぞれの病院に勤務するスタッフへの医療・医学情報提供としての役割、患者さんへの正しい医療の理解推進、医学のわかりやすい情報提供は、病院の大小にかかわらず求められていることでありましよう。

公的病院の経営は一般的には厳しい環境が続き、今後図書費を増額して行く事は困難な状況にあります。各日赤病院の図書費用もまちまちです。図書の購入やスペースの問題、専属の職員を配置できないなど予算に関連したものが多くみられます。しかし赤十字病院全体では年間多額の図書費が使われていることも知る必要があります。

8月に行われた日赤図書室協議会研修会では、これらを含む多くの議論が行われたように思います。整備されている病院の図書室には多くの文献の依頼が他病院から寄せられ、職員の負担になっているとの指摘もありました。患者さんへの図書コーナーでは、古くなった診療ガイドラインを置いているなどの指摘もありました。一般の図書館と異なり、同じ

本であっても病院に置いてある医学関連の本は患者さんにとって意識の重みづけが違います。また我々医療側の利用者も性急なフルペーパーの依頼などマナーの改善に努めることも大切なように思います。

人生100年時代が到来しようとしています。健康への関心は益々深まるとともに誤った健康情報も氾濫しています。私達医療者も自分の専門のみならず、患者さんがどのような目線でどのような情報を得ているのか知る必要があります、それらも含めて情報を提供する事がこれからの図書室の役割ではないでしょうか。

多くの問題が指摘されている病院図書室ですが、赤十字病院全体の連絡を密にすることで、これらの改善を見いだす委員会としてもお役にたてればと願っています。

#### 参考文献

- 1) 城山泰彦. 今日の医学図書館. 2008 [引用 2018. 10.16]; 295: 28-36. <http://current.ndl.go.jp/files/ca/ca1659.pdf>